

[講演要旨]1703 年元禄関東地震による海岸環境変化の影響

一房総半島南部を事例として

首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 村岸 純

The social effect of the long-term coastal environment changes after the 1703 Genroku Kanto earthquake in the southern part of Boso Peninsula.

Jun Muragishi

§ 1. はじめに

元禄関東地震(以下、元禄地震と略称)は、元禄十六年十一月二十三日丑の刻(1703 年 12 月 31 日午前 2 時頃)に相模トラフ沿いで発生した巨大地震である[宇佐美(2003)].

これまで元禄地震に伴う地形変化やその影響、地震後の長期的な変動に関して研究を行ってきた[村岸(2008,2009)]. その後、研究対象地域を拡大し文献調査を継続してきた。元禄地震の被害だけではなく当時の人々や社会への影響という視点で研究した成果を報告する。

§ 2. 研究成果

本発表では房総半島の南部地域である館山市・南房総市・鴨川市の事例を述べる。また南部地域に近接する上総国の事例も併せて紹介する。

2.1 館山市

房総半島南部では元禄地震により地盤が隆起したことが知られている[例えば、松田ほか(1974)、宍倉(2000)]. 隆起の例として、天保二年二月に書かれた「柏崎浦高之島湊普請助力帳」[『千葉県歴史資料編 近世2』をみると、柏崎浦高之島周辺では元禄地震後、十町(約1km)あまりが干潟となった。また、沼村(館山市)から高の島までの地域に石積みがあり、これが地震により破壊されたという。其上、年々西風により砂が吹き、浅瀬が増えたことがうかがえる。

2.2 南房総市

隆起の影響により村境を再確認した際の史料が残されている。例えば『新収日本地震史料』第二巻 別巻所収「相渡申海境證文之事」がある。地震により千田(旧千倉町千田)、平磯(旧千倉町平磯)両村地先の海岸が隆起し陸化したため、両村の海境を再確認した時の証文である。この史料は地震の翌年に書かれたもので、隆起した地域の村境の確認や漁場の再確認の作業が比較的早い時期に行われたことがわかる。

2.3 鴨川市

滝川(1997)によると、中世以降磯村(鴨川市)は、津波や浪欠という自然現象によりかつての市街地の大半を失っているという。その根拠としてかつて磯村に所在したと伝えられている寺社が、他の場所に移転して現存していることをあげている。例えば、八雲神社・釈迦寺の移転である。だが、この寺伝史料の信憑性に関して歴史的な視点から再検討する必要がある。

土地の減少に関して石高の変遷をみってみる。磯村の石高は元禄地震直前に書かれた『元禄郷帳』によると磯村は、73.22000 石となっており、地震後の『天保郷帳』には 64.80100 石と減少している。減少した原因については記載されていないので、元禄地震による影響であるかはこれだけでは判断できない。今後、原因を検討したい。

2.4 上総国における影響

上総国は房総半島中部に属する地域で、今まで述べてきた安房国の北隣である。

『私説勝浦史』には、屋敷欠損じの浜勝浦の百姓 6 軒を岩切「城持台」に移転、津波用心のため町地(新屋敷)に通路を開削する、とある。地震で屋敷地が欠け、その後の津波対策に力を入れたことがわかる。

『岬町史』によると、中原村(現いすみ市)で、大津波以来年々崩れてしまい芝砂間が広がった、という記載がある。この地域でも地震後の長期的な影響があったと考えられる。

§ 3. おわりに

房総半島南部では、元禄地震によって土地が隆起し干潟ができた。そのためそれまで使っていた塩田が使えなくなったり、湊が使えなくなったりしている。負の影響だけでなく土地が隆起してできた干潟が屋敷地や田地に使用されている例もある。長期的な影響がわかる事例である。

今回、房総半島南部地域でも影響の地域差があることがわかった。今後この地域差の要因について検討をしていきたい。また、北隣の上総国に関しても、調査地域を拡大し史料調査を継続していきたい。